



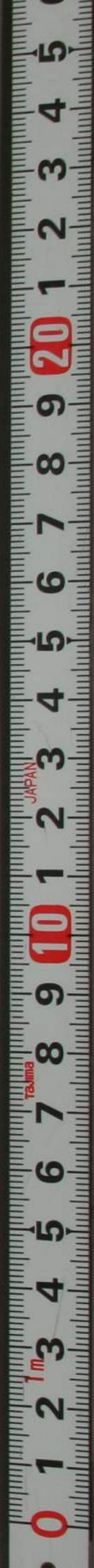
里見八犬傳

第八輯

卷四



709
42



門遠 13
第 709
卷 42



明治三六年
十月九日
講求

南總里見八犬傳第八輯卷之四上套

東都 曲亭主人編次

第八十回 殘仇を斬る毛野莊介と戦ふ

復説馬加蠅六郎御武あちて落葉の刀ひたさ引提ひきだて發見はるまち立出たて鎌倉か寒見さら
對勢たいせい以も凄せトとかりけれは寒見さむ見みのの駭おど怕おそれて吐はきかと叫こぶは左右さうよりも若わ黨とう奴ぬ隸れいがま手てをを食くへ
項かたとと抗かて動う甚し登のぼ時とき御ご武ぶ声こゑ高たかくはなはれはをを巧たくま奴ぬ今いまちちをを叫こびはりはをを許ゆるさは然しかしもて
故ゆゑととて汝なんぢがま首くびをを刻きつはわはるは先まにに未ま期きのの引ひ道みちをを説とくはしはりは听きねは抑おさへは儂だらとと這こみはりは刀やのの鋒さをを人ひとを
落お葉はとと命いのちけはるは世よのの重おも宝た就た中ちゆう落らく葉はのの刀やのの銳ととと莫な邪や亦また異いるはるは大おほきををを人ひとを
斬きるはとと死しのの時ときををききとと四よ下くだるは木き葉は忽たち地ち零こるはととのの因よりは落らく葉はとと命いのちけはるは聲こゑのの故ゆゑ管
領りやう家け持ぢ氏ぢ主ぬしのの名な刀やをを村むら雨あめ九くとと相あ似にるは奇き特とくあはりは或あるののひををを銚しやうととアア三さん

八犬傳八輯卷四上

八犬傳八輯卷四上

るれば主君の安んずるに東武へ帰城の路次を銚物なるに東西わかれ必ふ
折料を汝とえゆれば縛のあ及べん左も右も世の棄れて活る申斐るは弱不具の
乞巧なるの身の業報回でもあは天罰也然る死するの悪業の盡されざる
治も死ねば一殺も殺さる武士の慈善を曉る謀る思ふ覚期極めて合堂を苦
痛とさるるに身勝を並立て誇負論せし丁田豊実も杖より乞
巧の對して寒見よ汝の果報を。目今主のいれど死を樂めて死を死その命根を
一刀断るは是幸あるに況も裂く名高る落葉の名刀也苦痛も覚る往生の
後の世に安んずるに然るに銚物も銚物も木葉の落る奇特は是主の御感の
預て禄も増さる。余の汝が與る法師を取衣經を讀む追薦佛交すの願
實の龜の浮木より遇る大檀那の遺ひの造化の妙を冥に命を
惜む白物之迷を醒せ曉る。理のりと打合槌の胸を苦に鎌倉寒見の戦れる膝を

て。權且息を吐き重の項と稍鶴と眼と睜と左見右見て刀袷達しの憐れなる
冥趣を身取りの理のる歎知れど已の一切あるに約生と活物朝生を
夕の死者の命の惜るるを巧るるを殺るるを然るのあやも身の野曝し家も
足の跛ても多の腫ても苦もあれの樂もあれの世の常情を日毎に竹杖の千載の
齡も美夜も宿る松蔭も萬代も心も知る誇負の薄情も思ふ
るに恩の被けつるに刀の奇特を試さんと命を取ら過る。死に千歳を歷し
らんよ。生る一日が優れ。この世の里の往還の人を俵の右左の袖を望
しからぬ刀の内に御法拾の御用宗上見違ふ通るを。今も命を惜む。助ける
瞪る声奇きて這奴甚大胆屠所の羊を。今も命を惜む。助ける
物の本性常言の驢耳彈琴益るは問答時の老朽らん快々銚物。と。慌る鎌

八代轉入畢録

二

の文

倉寒見の才覚期を極めけん。近着く御武を推禁め佐と睨之。刀松達徳を
陪話す。聴くは是非も。今何ぞ隠れ其も是武も果年来寛家を
殺さん。外見隈の世と潜る假の乞巧と知む。悔りぬ。怪我のあらん。本意を遂げ
て素も怨も。刃袖と轂も果さる。好すか。取交れども。允されん。脱る路あり。
誘ひ敵も。死後とられて。驚く御武豊実伴當さ。氣味好く。憶も。多放ちなり。
然れども御武の阿容々々。と。己ぬ。死勢ひ。此も怯ま。声と。立て却咄。誘
へ。真の仇討る。鏖網襲交。劍武器。準備の。今も東西。當坐の。慢語
脱る。便直であ。えん。又近着く。鎌倉寒見の。身邊。息杖。成
撥合。御武の。宵前。近く。衝着て。高の山。阪長。榎の。息杖。息が。ま。命の。建場。多
其首。御覽。せ。冷。竹。御武。然。鼻の。粘。面。皺。め。苦。笑。ひ。丁。田
主。商。命。取。る。悲。し。這。奴。心。乱。れ。乞。巧。の。技。相。応。似。而。非。能。優。あ。ま。い。か

豊実のうらみ大ひて足踏でも口を。現朝勝るもの。勿論世の寒見の仇敵も悲人
敵討る。この故事を。わねも。這奴が寛家の甚廢るもの。君父の讐。妻敵。後。の。情
由。い。の。向。を。寒。見。の。言。わ。つ。一。條。某。の。年。來。汝。を。寛。と。所
在。と。寛。家。の。親。の。讐。言。わ。あ。又。妻。敵。の。口。は。金。が。寛。家。宅。親。の。家。を。追
出。し。親。類。の。門。塞。り。竹。馬。の。友。も。え。世。と。契。り。空。枕。一。夜。の。夢。は。多。く。柳。巷。か。よ
ひ。の。錢。を。れ。俺。其。首。路。絶。て。斬。断。や。熟。妓。の。き。蜂。吹。れ。佳。成。果。も。皆。足。金。の。所
為。な。れ。の。で。那。奴。の。環。會。で。俺。這。怨。を。復。え。と。多。の。の。運。徹。く。才。世。貫。一。の。の。
面。汚。き。菜。小。屋。荒。し。布。寐。の。夢。あ。打。と。る。金。鬪。枝。の。ま。え。提。れ。世。の。遇。わ。い。あ。い
乞。巧。の。寒。見。よ。の。れ。跡。の。月。の。日。の。照。う。の。形。形。高。憐。も。も。喃。と。口。説。と。听。の。御
武。の。足。踏。鳴。ら。焦。燥。て。の。く。横。は。あ。世。迷。言。や。暇。の。も。呼。吸。の。音。留。と。抜。閃
く。毛。刃。の。光。の。鎌。倉。寒。見。の。苦。と。叫。び。息。杖。の。會。落。又。擡。取。て。ま。ま。れ。羽。脱。鳥。の

八代轉八郎

の文綴

兼束の両刃と通ずりて俱より受よと罵誇る少年の形も形状の窶れも又勢を控及胆勇廣
言名止りて考る八丈隨一大阪毛野胤智が浮世を潛る假乞見這里光陰を暮御の別名
かけて苟且相摸小猴子と喚れども果敢るる身と銚され終の煙と薪推る鎌倉寒見の
似而非猿樂も亦似るるもあられの之駭く御武豊実此彼送す目注なる中御武を
怯れさせし声高き原本来這奴の年舞子化て俺が先代の親子後類きりる敷
も果と逃亡る大阪毛野でもりるは汝が仇人も知る只那籠山逸東太縁連きも敷もせ
常武大人も怨むる義違ひ法法の周敷も天道もあられ今もあられもあられもあられ
多ぶる汝が親の東西も汝這方かよひかて俺も仇も罵る似而非廣言只夏虫火魚等
志は奮動の自徒死不出入又一層は是家裏に在獲るは曩も汝と共侶岩濱の城に逃亡る大田
小文吾悌頼近属越路流落落りし片貝殿の知るありし同思大川莊介と俱首首を刎
られし今も首級と這両刃と片貝殿も賜る武藏還り路りて汝が首と相添る俺が先

代怨を復は是私の幸のまら石濱殿奉與も向と起武門の天功御感も八人の増也
其首を復とと敷圍り合られ腕と振断て首を敷んと見是左の方より豊実も俱小
刀を引抜たてまきと斬りて登時毛野はも騒ぎ御武も不管そ廿二小敷も刃を
飛鳥の如く翔躍縦横を身する修煉の剽賊瞬く間も難く刀尖を左へ流し推止る刀を
丁と枕合きて怯むと透きも礮と斬る美の牙御武も首を多く地を落し軀も礮と付しけり
必不倍る少年は武勇の傲く豊実のあを朽惜しとどろろ逃走んもさるる伴當進免
と喚りて推合も籠んと王從四名が抜連なる刃の電光競ひ鬼とものもせり毛野は左右
受流し前後も當の本奮敷も突戦要時もあるは一個の奴隷とぞを斬りて返す
刀も若黨の肩に深傷の血滴通漏苦と叫びて一及なる走り息絶る伴當三名
敷られも豊実の心慌て巻も狂る危窮の受大刀毛野は流ると踏入も眞實けり大刀風お
まきへうのゆきも豊実も休まらば小影を研りて吐唾とるの一声叫びて逃走るを脱す

と趕ふ大阪の後に残る一個の奴隷が敷きんとする刀の光も毛野の身も沈み左へ外
を至妙の拵は小鳥を扱む若雁鳥の勢ひ當りかけれ奴隷の刀を打落され痛痒も肩を
は、外にける任う程の莊介小文吾と共侶馬加丁由西東使の跡を趕ひ夜を日小継ぐ
信濃路投ていそびつ折獨逸速く諏訪の湖水の頭まで來り前面を見且せ見
とみなり少少血刀引提て鶴立たり癖者あるんと必ふを竊み後方より近きて樹蔭
倚り覗ひる毛野の奴隷を趕捨て又豊実を趕すせむ性方も知るまろりいそびつ折
那奴を一箇も漏さず敷きんとすいそびつ折の器ありと獨語り單衣の鈴折返して又鮮
血を二三遍推拭ひ遺る鞋を合抗てせむ敵を極武の屍骸を撈り小篠の刀を抜
合らう左見右見て落葉の刀の共小腰を跨々愀然と大甲の息を吐く歎息の外
るりいそびつ折の器ありと獨語り單衣の鈴折返して又鮮
走り鬼の刀の端を握り留め引戻せど毛野の引きつ折の器ありと獨語り單衣の鈴折返して又鮮

此も騒々氣色も冷笑ひ又又と汝も敷きれ馬加丁の伴當る外もせむ眞士の伴の願
志は命を捐し出す敵と向せ果て莊介の怒れる声もゆり立す噫意氣過る癖者か
俺も馬加丁田門と趕々這里まで来てこれらるる汝が與舉動今那王從三名を敷き果
去すのそとで俺もよく獲り欲す小篠落葉の両刀を奪取り一方は人を殺し
不義の利を飽きぬ山豪ある遮莫敷きれ者の與怨復來未成時宜儘
その両刀を俺に返すが許も然然と頸を置いての強勅の出世小あまでもいやは去せん
快返せと馬加丁又引きまを毛野の肉りと振動る面を對し作と疾視て原來は要あり
奴の年齢を推計す俺が怨敵あはれも這両刀をよく知り心かたし那親族はあ
どそも身の分際をわめて慢不事つ受てもやと敷圍て目光りと引抜く落葉の石刀
真額臨で敷き刀尖を莊介の刀の鏝を受けて彼此身を反せ程もある敷き刀を
復引外に抜合して一上下と盡す勇士と勇士の烈し大刀响丁々礮と承せ受て



八犬傳八冊卷四上

○文翁堂藏



左
 名刀を賣弄し
 奸童命を喪ふ
 右
 家傳疑ひ残
 解る舊刀
 舊主又返る

八犬傳八冊卷四上

○文翁堂藏

望む所あり。和君の仇を縁連の所在と榜りよむ。多量の秋料の巨かり。このき、
死をねと推辞し小文吾推察せ返すとの大阪生も受しと辞ふ大川の義と車とせる
所以これに介意あるをなす。其もと論を。時具任しく舊主返さ自然ら
の大阪生所多。這西刀の来歴の始は。箇様々。終に。大川衛士が自後
折刀。没官せられた。又年々。歴て小文吾。舊果在り。時件の二刀と購求め。後信乃
贈りし。却介后大川の家の名刀多し。知られ。その折信乃が莊介の返せし。今番の厄の片貝。又這刀を没官せられ。那假首級と共侶。小文吾が刀さへ石濱大塚
兩所の使者の遞とされたと傳へ。稲戸津衛が好意あり。死を免し。その夜又竊に
異刀を贈らむと。跨り。那里を潜せ。崖略を云と。辭短く。其さ。毛野を只
管歎賞し。寔に東西を離合の刀と主と凶吉禍福別。其さ。意外の奇談
感ざる。餘あり。然も。傳來あり。今退り。按さ。逆臣馬加常武の苗

蹟。立一千兼殿。這西刀を返すも。自親子の忠信孝義。あり。況當
日這西刀を寛家。龍山縁連が竊取り。あつた。それ。その
ある。願ふ。今より大川生。這刀。懸念あり。刀を収め。ひね。連の。已
ざり。莊介。美引。性。厚く。諭。受。朋友の。信。知。ら
ぬ。似。今。固。辭。後。い。和君の。亦。何。を。その。身の。衛。あ
る。寛家。と。素。年。來。の。准。備。い。く。毛。野。の。荒。介。と。笑。く。その。毛
心安。這。西。刀。を。還。さ。も。某。亦。年。來。竊。藏。奉。の。二。刀。あり。且。毛。野。を。奪。ま。ん
と。懐。を。握。柄。も。多。く。出。ま。七。首。を。扱。け。玉。散。る。新。月。の。四。下。輝。く。天。晴。々。作。鏡
味。也。と。莊。介。小。文。吾。俱。の。感。嘆。を。う。ける。當。下。毛。野。の。七。首。を。會。直。一。鞋。を。飲。め。これ。の
之。の。強。敵。也。尚。征。ま。る。足。さ。れ。の。外。大。刀。あり。鏢。細。襲。衣。胛。脚。着。も。苞。藏。め。土
中。の。隱。し。南。の。塘。隄。の。腰。あり。い。く。と。い。ま。ら。身。を。起。一。走。り。去。て。件。の。苞。を。引。提。て

鮮用をとりし。小文吾急を推林めて。这里を那首へ。何道なる。不時を殺さる。人
知れ。進退難義。及べ。御前某大川の後れ。走りと。這方へ。ある程。行は衣ひせ。一
個の武士の小髯の疾を肩より。路傍の穂ひく。其を喚留め。咱們を武藏の
大塚。大石殿の家臣。諏訪の湖水の頭。癖者。狼藉せられて。か。の如く。疾を
肩ひ。其のあ。賜へ。と。請求する。ある者。を。踏。る。刀。片。貝。を。没。官。せ。し
ま。俺。腰。刀。を。し。けれ。是。る。ん。丁。田。畔。五。郎。豊。実。あ。る。ん。と。猜。した。心。勇。ま。し。声。高。や。う。あ
る。来。汝。の。豊。実。越。越。路。よ。う。と。汝。們。が。後。を。趕。り。今。来。ぬ。大。田。小。文。吾。を。知。る。所。は
や。と。名。生。り。お。駭。く。豊。実。の。訝。り。さ。う。身。を。起。し。七。刀。を。抜。ん。と。け。は。を。抜。も。果。む。頭
顛。敷。も。落。し。件。の。刀。を。復。し。易。ぬ。由。元。の。類。も。刀。を。屍。骸。の。邊。へ。送。り。と。更。も。走
り。大。川。の。邊。着。泊。する。と。大。阪。生。は。再。會。せ。し。よ。り。件。の。豊。実。御。武。士。の。縛。の
趣。具。不。知。り。是。是。と。令。復。した。刀。を。二。大。小。示。せ。毛。野。の。所。々。笑。坪。入。り。る。を。

中井井八の感。と。大。な。ま。ま。も。額。と。拍。り。通。徹。妙。計。ひ。あ。る。某。と。も。家。傳。の
刀。を。大。阪。生。より。泊。り。し。津。衛。の。刀。へ。御。武。士。の。屍。骸。の。邊。へ。送。り。と。更。も。走
り。折。備。俺。們。の。面。刀。の。再。も。入。る。と。あ。ら。う。這。換。刀。の。便。不。就。も。返。し。ま。ぬ。と。い。ふ。不
要。な。東。西。何。時。も。留。人。是。も。亦。御。武。士。の。屍。骸。の。邊。へ。送。り。措。け。那。萩。野。井。が。令。
抗。越。路。へ。と。あ。ら。う。と。あ。ら。う。と。あ。ら。う。と。李。杜。が。挂。徐。國。の。君。の。昔。の。劍。と
い。ふ。ま。ま。情。深。く。縮。戸。の。志。の。致。失。然。い。と。恥。て。件。の。三。刀。を。引。提。り。さ。う。身。を。起。せ。
毛。野。の。俱。子。と。あ。ら。う。と。小。文。吾。や。よ。と。喚。林。め。り。酷暑。は。往。還。の。跡。絶。し。も。時。程
で。う。茶。店。の。主。人。が。村。長。を。報。す。け。ん。余。ら。衆。人。聚。る。且。萩。野。井。の。後。を。追。う。と。い
ふ。今。生。も。來。ぎ。え。ぬ。又。逃。亡。の。伴。當。和。君。と。認。り。の。あ。ら。う。と。慢。り。那。里。へ。の。危。し。和
君。の。這。里。と。立。ま。り。甲。斐。の。某。の。大。川。と。俱。子。を。立。て。面。を。隠。し。其。頭。を。過。る
旅。客。の。似。と。あ。ら。う。と。那。兩。刀。を。送。り。措。け。趕。着。ん。這。義。と。あ。ら。う。と。又。井。八。の



東使と起て
 萩の野井
 凶変と聴く

十三

文彦彦彦彦



小文吾路撃手豊實
 こぶんごみちの
 とよさきとる

小文吾



大田の意見その理あり。ちも揃う。ちも入る。要する。快立退く。俺們を程も路も等々。
於小原方血を巻隠し。ぞ目外られぬ。と論まふ。毛野の推辭難く。信のらぬ。
せん。某も甲斐のく。約の十町の内。幹浄。外等。那里。赴たぬ。と。
便やく。近づく。快引返。ぬねと心。附け。屬ら。毛野。稟苞引。立別。替。
諏訪の湖。上。社。伏拜。逆。橋。久後。今。恙。考。秋。風。戦。
樹立涼。青柳の驛路。投。小程。小。小。文。吾。の。御。武。の。敷。れ。る。
邊。要。時。徘徊。の。動。静。と。現。村。長。と。お。の。の。二。箇。も。聚。
ひ。ま。程。遠。く。ぬ。里。人。と。路。の。走。違。ひ。罵。諺。と。ち。つ。小。茶。店。の。翁。が。唇。
飯。た。う。く。稍。か。う。來。ぬ。折。御。武。主。後。の。枉。死。の。骸。を。初。と。た。る。と。胆。漬。
引。返。し。先。と。緯。の。趣。と。祝。殿。小。告。稟。さ。え。と。そ。終。走。去。り。と。這。里。と。諏。
訪。の。神。領。ふ。神。職。の。宿。所。へ。近。く。ぬ。程。を。其。首。より。入。の。ま。茶。

店の主人も在るとあけま。倍々。便り。小。原。の。推。方。那。那。兩。刀。と。潛。り。お。
御。武。の。屍。骸。の。邊。へ。送。下。措。々。退。き。又。小。文。吾。不。其。く。俺。們。が。假。首。級。の。淵。六。穴。
ハと喚。做。小。賊。の。頭。顛。る。れ。惜。む。ぬ。の。る。縁。も。俺。が。姓。名。を。冒。され。鼻。首。
せ。と。あ。く。一。時。の。權。の。せ。快。く。ぬ。所。あり。心。裏。恥。し。と。あ。く。と。小。文。吾。
點。頭。く。その。美。亦。某。中。豫。め。ろ。掛。り。件。の。首。級。の。御。武。們。が。鎧。櫃。の。秘。置。
と。傳。へ。る。と。の。あ。れ。引。出。湖。水。の。論。め。走。ら。送。恨。る。と。快。く。と。を。せ。
莊。介。要。時。と。推。林。め。首。級。を。奪。ひ。易。け。れ。も。然。で。萩。野。井。三。郎。の。難。業。及。
ぶ。と。の。あ。る。那。三。郎。の。い。ま。と。え。末。也。その。所。以。あ。て。後。れ。り。と。竟。不。寄。來。ぬ。と。
お。の。那。身。不。苗。害。あ。る。情。深。か。る。由。元。の。恩。を。仇。り。復。ま。似。と。思。ふ。と。思。
念。を。旋。る。ま。件。の。首。級。の。小。瓶。の。斂。め。酒。の。浸。し。と。鎧。櫃。の。秘。置。と。を。快。そ。
酒。を。捨。る。箇。様。々。不。做。る。是。三。郎。の。越。度。も。知。炎。暑。の。比。る。れ。頭。

願へ程き腐爛れて鼻首をかきまらふんぞうん。あめいのと耳けが小文五郎の合
笑てその談定不奇妙之介が人の取合ぬ所も多き下。誘ふとふり又共侶の
舊所へ赴く。那伴當が茶店の邊へ御一措方。御武と豊実の鎧櫃と葎菅の
蔭へ拾入ま。推用は兩箇の小瓶をさし酒を傾け捐。茶店のあり金の湯に
件の小瓶を汲入ま。故のどく斂めけり。這頭の下の田舎を物親んとあふ人の
を。這時までも往還の稀めて取合ひまものま。二天士の造化精妙。とら目と目と合
緒の落草鞋は足軽く。竊其首と退還。大阪毛野の約束の甲斐路と投ま
と既八九町前面の岡多樹の下蔭。毛野の久候々。恰纒小文五郎が来
ぬとてまの玉招きま。那里の首尾を話けり。登時小文五郎社介。那処の動
静首級の。箇様々々と送ゆる。送代耳に報。信れ今と那頭。あひ送ま
隈も。和君のうも俺們的去来さ。不此彼と報。信れ今と那頭。あひ送ま

今宵の旅舎少く盡ま。誘共侶のと倡道不。毛野の少く飲ひ。後小跟先小
立。俱小く二三里あま。青柳の驛小束にれば。晡時をさる小ける。猶もあたま
おくべり。送急が逆旅。ま。這驛路。客店小。宿の投めけり。話分
両頭介程。秋野井三郎。這朝豊実。御武の敷れ。さるれば。未明小件の兩東
使の旅舎と出。し。と知るま。十刺あ。後。心頼。小焦燥の。伴當們を
いそしく。快趕着んと欲せ。か。あ。の。日。の。殊。の。暑。か。り。け。し。主。僕。疲。勞。れ。ま。小。の。中。
似。目。景。斜。小。り。比。洗。馬。塩。尻。ど。ち。過。か。諷。訪。の。湖。の。程。遠。く。小。松。原。ま。ま。
束。折。路。傍。の。夏。草。の。敏。多。下。小。仆。臥。る。旅。人。の。方。纒。秋。野。井。們。
近。く。隨。小。忽。地。頭。と。拾。げ。ま。片。貝。の。人。々。よ。次。負。け。あ。と。喚。り。たり。當。下。秋。野。井。主。
従。の。訝。り。あ。り。ま。と。熟。視。れ。別。人。多。き。ま。御。武。の。奴。隸。也。鎧。櫃。と。擔。荷。る。
似。見。介。と。喚。做。ま。の。へ。腰。ま。下。の。血。塗。ま。を。行。歩。不。便。小。え。ま。三。郎。酷。く。敬。馬。に。

みかゝるの故を問ふ似見介才身と起して主あぐり御武の御高丁田殿と共侶の
 諏訪の湖の頭を茶店の重時隠ひ折落葉の刀を弄びて小塘堤の下るる跋
 蹇を乞見と銚斬ふまけるその折年十六八時一個の乞見が走り去り俺東人と扼り矢
 庭の刃と捲取るまはれん若黨二十平及丁田の奴隷さ此皆敵も果されぬその為
 体は任々之箇様々々の術者なれば只這三名のまわりの丁田殿も瘡を肩を逃走の
 あふ程在下も亦かゝる如く左の膝を破れらるるかきまもわされれば後れ東の備輩の
 告んと以ひつ辛くして引外と逃て這里まで来まされぬ痛癢の苦痛も瞑眩して付れ
 且く黒白と見えまをなく俺かゝる今も此一先の程馬加丁田両個の伴當若黨
 奴隷八九名後れ来ぬらち連立折よく這里を過りぬ遠く喚近着けて那
 大變と告知せ身の介抱を馮きかゝる大家駭謀くのまの先途を後左も右も
 せん這首の居れとるるのまゝ勸ものまゝ湖水のかへ直走の不走りて二人あがるまを唇

たふ往還稀るる其暮るる知る人あゝ命果敢をなすべしわれ極せぬかいらと
 苦くは口説くと二郎うち聞き駭呆る伴當と遠くえらてはる異変をす
 が。重時時猶豫まをば俺の那里快ぬ件。の容子を檢索せん若們の二面名這
 似見介と肩の被て推續は跡より来よ痛癢もも灸所あわぬ死ぬべうのど
 絲も。這が東人の不覚の枉死の證據あるべぬか。と勸りねと吩咐。飛が似
 く不走去れば一個の若黨鞋奴空ののれを送ともその餘の伴の後とど喘
 喘を走らける。悠而秋野井二郎の御武們が敷きた茶店の道這あては且既
 きて地方の役人諏訪の祝の家臣其亦深澤の村長下諏訪の驛長も此彼
 とる来會して絆の詮議區々これある茶店の主人と御武豊實の伴當の
 後れ。這里のあつこの那顛末を質問せし茶店の主人の曲辰夫を折々山田の
 畔作の園宅の男女暇あつた代ものけるはよも權且店を空や吞飯たうべ

退る。その間の事、辨の始末を知るといける。又御武豊実の伴當の東人
珠更路次と急ぎ、捷徑のまゝ走り、大後れ、その路違ひ、遅速あるの
故、辨過して、道端、這里の事、仇と認るも、わづらひ、迷惑、怒りのまゝ、いと言
語、亦一陳、その一箇も證人あると云、茶店を距る、数十歩、小く、云、馬と云、不
一個の男子の胴斬せられ、この所、為、夜と云、へとも、又豊実、も首、被、なれて、這里を距
ると、五六町、田畔、屍骸のあり、地方の、の、報、うけり、信、れ、一人の、所、為、あ、ら、ど、と
なる、小、く、照、驗、を、け、れ、豊、実、の、亡、骸、と、も、則、這、里、に、た、り、と、求、く、只、願、衆、議、成、疑、を
折、ら、長、尾、家、の、副、使、を、萩、野、井、三、郎、が、来、つ、る、小、ま、那、似、兒、介、の、口、状、を、生、口、及、
び、衆、人、の、疑、心、初、と、解、け、り、畢、竟、萩、野、井、三、郎、が、祝、の、家、臣、們、不、對、面、と、相、計、
趣、甚、麼、ぞ、や、と、又、這、下、の、卷、の、解、分、を、聽、絲、か、し。

里見八犬傳第八輯卷之四上套終

